

師範試験実施要項

▽第六十四次漢字部課題

○漢字部 次の作品三点〔何れも半切35cm×135cmに揮毫〕を提出する

・規定《書体 楷書》

半醒半酔遊三日 (唐・杜牧)

讀半醒半酔遊ぶこと三日

註半ば醒めているようで、また半ば酔っているようにして、三日も遊び過ごしてしまつた。

・臨書 孫過庭 書譜 十六字

五合交 臻神融筆暢、無不適蒙無所從

讀五合交も臻れば、神融け筆暢ぶ。暢ぶれば適さるなく、蒙ければ従る所無し。

・随意《書体 行草書》

張琴松下風聲細 讀易梅邊月影斜 (潘加瓊)

註琴を張るの松下風声細やかに 易を読むの梅辺月影斜めなり

註そよ風の吹く松の木の上で琴を弾く用意をし、月の光が斜めに降る梅の花咲くもとで『易経』を読む。●張琴琴の弦を張ること。

●讀易『易経』を読むこと。「五経」の一つ。占いの書籍。

▽第六十四次かな部課題

○かな部 次の作品三点〔半切35cm×135cmに揮毫〕を提出する

・規定《書体自由》

嵐吹く三室の山のみぢ葉は竜田の川の錦なりけり (能因法師)

註嵐の激しく吹き下ろす三室山の、散り乱れる紅葉の美しさは、山下の竜田川に浮かび流れる今も昔も変わらぬ錦なのである。

・臨書 関戸本古今集(伝 藤原行成)

ついでどもそでにたまらぬ白玉は ひとをみぬめのなみだなりけり

・随意《書体 自由》

世の中は三日見ぬ間にさくらかな (大島蓼太)

註「さくら」桜は咲くのも早い散るのも早い。世の中転変無常であることを桜に托して詠んだ。三日見ないうちにもう咲いたとも、もう散ってしまったとも解される。

▼第二十二次詩文書部課題

次の作品三点〔何れも半切35cm×135cmに揮毫〕を提出する ※形式は縦作品に限る

・規定《原文を尊重すること》

この石よ飛んで土手なる地藏をば越えよとこそは投げつづけけれ (窪田空穂)

・臨書 (いろは歌) いろは歌を半切に揮毫、得意な古法帖(限定はしない)にて。全部ひらがなでもよい。

いろ(色)はにほ(匂)へどち(散)りぬるを

わ(我)がよ(世)たれ(誰)ぞつね(常)ならむ

うる(有為)のおくやま(奥山)けふ(今日)こ(越)えて

あさ(浅)きゆめ(夢)み(見)じゑひ(酔)もせず

・随意《原文を尊重すること》

年の夜やもの枯れやまぬ風の音(渡辺水巴)

註「年の夜」大晦日の夜も北風が吹きまくり、草木を枯らし続けている、の意。わびしく吹く風の音に時の流れも暗示されている。

― 受験についての注意 ―

一、受験資格 漢字・かな・詩文書とも準師範。但し、『日本書道院展(二回以上)出品経験者』で、満二十才以上であること(二〇〇三年四月一日生まれまで認める)。

一、受験料 一万円(漢字・かな・詩文書の別) 受験料は作品と別封とし、振替にて同時に本院宛に送付のこと。

一、本院主催の日本書道院展に二回以上出品の者(部門不問)。第七一回展出品も可。毎日書道展出品も考慮する。

一、受験者は師範受験申請書を作品と共に提出のこと。

一、申請書は、返信料として84円切手を添えて本部へ請求のこと。

一、漢字部・かな部・詩文書部合格者には認定証プレートをそれぞれ交付する。但し登録料として五万円納入のこと。認定証プレートの姓号は申請書の姓号によつて作成する。

一、切 十月二十日 発表十二月号

一、作品には申請書に添付の出品票を使用して準師範になった年月(日本書道誌発表の月)を記入して貼付すること。又、作品の左下隅にも同じく鉛筆で段位・支部名・氏名を記入のこと。

一、不合格者(規定違反も同じ)はその氏名を發表しない。

一、師範試験作品は白画仙紙を用い、封書に必ず「師範応募」と朱書のこと。

◎なお、(1) 試験の結果をお知らせするため、返信用封筒(切手貼付、宛名、住所明記のもの)を同封のこと。

(2) 提出した作品は一切返却しない。

◎月刊「日本書道」十月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

◎出品作品には雅印押印のこと。

◎受験者の事情により一点又は二点のみを本年受験し、三年以内に三点受験することもできる(受験料はその都度一万円)。

▼第七次硬筆部課題

次の課題を(硬筆用紙)に書いたものを三点提出する

・規定《楷書》

路逐山光何處盡 春隨草色向南深 (劉長卿)

読||路は山光を逐つて何れの処にか尽き 春は草色に随つて南に向かつて深し

註||道は遠く山に向かつて続き、春は草の色によってわかり南の方はしだいに濃さを増している。

・随意《原文を尊重すること 書体自由》

現身の眼にはとまらぬ妻が魂天翔り来て今は此所に居む(窪田空穂)

・臨書 高野切第三種(伝 紀貫之)

わがいははみやこのたつみしかぞすむよをうちやまとひとはいふなり

― 受験についての注意 ―

一、受験資格 準師範

一、受験料 六千円 受験料は作品と別封とし、振替にて同時に本院宛に送付のこと。

一、受験者は師範受験申請書を作品と共に提出のこと。

申請書は、返信料として84円切手を添えて本部へ請求のこと。

一、合格者には認定証プレートを交付する。但し登録料として三万円納入のこと。認定証プレートの番号は申請書の番号によって作成する。

一、切 十月二十日 発表十二月号

一、作品には申請書に添付の出品票を使用して準師範になった年月(日本書道誌発表の月)を記入して貼付すること。

一、不合格者(規定違反も同じ)はその氏名を発表しない。

一、師範試験作品は硬筆用紙を用い、封書に必ず「師範応募」と朱書のこと。

◎なお、(1)試験の結果をお知らせするため、返信用封筒(切手貼付、宛名、住所明記のもの)を同封のこと。

(2)提出した作品は一切返却しない。

◎月刊「日本書道」十月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

準師範試験実施要項

▼第七十二次漢字部・かな部課題

○漢字部 次の作品二点(何れも半切35cm×135cmに揮毫)を提出する

・規定《書体 行草書》

雙飛照水螢 (白居易)

読||双び飛ぶ 水を照らす螢

註||二匹つがいになって水を照らしながら飛び交う螢

・臨書 集王聖教序(王羲之) 十五字

爰自所歷之國揔將三藏要文凡六百

読||爰に歴し所の國より 三藏の要文凡そ六百

○かな部 次の作品二点(半切35cm×135cmに揮毫)を提出する

・規定《書体自由》

大江山生野のみのちの遠ければまだふみも見ず天の橋立 (小式部内侍)

註||大江山を越え、生野を通つてゆく道が遠いので、まだ踏んでみたこともありません、丹後の国の天の橋立は、まだ丹後へ赴いた母から

の文も見えていません。

・臨書 高野切第三種(伝 紀貫之)

むめのはなみにこそきつれうぐひすのひとくひとくといひしもをる

▼第四十二次詩文書部課題

次の作品二点(何れも半切35cm×135cmに揮毫)を提出する ※形式は縦作品に限る

・規定《原文を尊重すること》

与謝海や藍より出でて夏木立(内藤鳴雪)

註||「夏木立」は丹後の与謝地方。「青は藍より出でて藍より青し」のことわざを踏まえ、海の藍よりも夏木立の茂りの方が青い、の意。

・臨書 (牛檉造像記) 六字

司空公・長樂王

読||しくこうこう・ちようらくおう

― 受験についての注意 ―

一、受験資格 漢字・かな・詩文書とも六段。但し『日本書道院展出品経験者』で、満十八才以上であること(二〇〇五年四月一日生まれまで認める)。

一、受験料 六千円(漢字・かな・詩文書の別) 受験料は作品と別封とし、

振替にて本院宛に送付のこと。

一、本院主催の日本書道院展に一回以上出品の者（部門不問）。第七一回展出品も可。毎日書道展出品も考慮する。

一、切 十月二十日 発表十二月号

一、作品には申請書に貼付の出品票を使用して六段になった年月（日本書道誌発表の月）を必ず記入して添付すること。又、作品の左下隅にも同じく鉛筆で段位・支部名・氏名を記入のこと。

一、不合格者（規定違反も同じ）はその氏名を発表しない。

一、受験作品は白画仙紙を用い、準師範受験申請書を作品と共に提出のこと。また、封書には必ず「準師範応募」と朱書のこと。

一、準師範受験申請書は、返送料84円切手を添えて本部へ請求のこと。

一、提出した作品は一切返却しない。

○月刊「日本書道」十月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

○出品作品には雅印押印のこと。

○師範受験時には日本書道院展出品が二回以上必要となる。受験の際は注意すること。

▼第十四次硬筆部課題

次の課題を（硬筆用紙）に書いたものを二点提出する

・規定《書体自由》

二月の日に夢みて夢の数落しと見る白梅の花（窪田空穂）

・臨書 蘭亭序（王羲之）十五字

既倦、情随事遷、感慨係之矣。向之所欣

読|| 既に倦み、情は事に随いて遷るに及びては、感慨之に係われり。向の欣ぶ所は、

注|| 飽きてしまい、感情が対象に従って移るに及んで、感慨もそれにつれて変わってしまう。以前の喜びは、

一、受験料 四千元

準師範受験申請書は、返送料八十四円切手を添えて本部へ請求のこと。

一、切 十月二十日 発表十二月号

一、作品には申請書に貼付の出品票を使用して六段になった年月（日本書道誌発表の月）を必ず記入して添付すること。また、封書には必ず「準師範応募」と朱書のこと。

○月刊「日本書道」十月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

昇段・級試験実施要項

▼第一三一回漢字部・かな部課題

第一部「半切35cm×135cm」次の漢字又は、かな（各書体自由）を半切の場合は、縦に揮毫したものの一点

○漢字部

漢殿草深鐘室閉 長淮春盡釣臺荒（余正西）

読|| 漢殿草深くして鐘室閉じ 長淮春尽きて釣台荒る

注|| 漢の宮殿は草に覆われて鐘撞き堂も見えなくなり、とうとうと流れる淮水は夏の訪れとともに釣り場も荒れ放題である。

●長淮|| 長い淮水。淮水は河南省に発し、安徽省を過ぎ、江蘇省を経て海に注ぐ中国第三の大川。

○かな部

心にもあらで憂き世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな（三条院）

注|| 自分の心に反して、この憂きことの多い世にもし生きながらえたらば、恋しく想い出されるであろうよ、この美しい夜半の月を！

一、受験資格 漢字・かなとも二級以上のもの。

一、受験料 一点につき 三千元。

一、成績により六段以下の相当級に編入する。

漢字・かな受験者の事情により昇段試験の課題（漢字・かな）を半切1/2（35cm×68cm）に二点（書体《書風》を変えるか縦・横にする）揮毫しても受験することが出来る。ただし、現在二級・一級・初段・二段の人は一点でもよい。

第二部「半紙」次の漢字（楷書）又は、かな（書体自由）を半紙に揮毫したものの一点

○漢字部

釣月耕雲（瞿法賜）

読|| 月に釣し雲に耕す。

注|| 月の夜に魚を釣り雲を帯びて田をすく。

○かな部

春の夜の夢ばかりなる手枕に かひなく立たむ名こそ惜しけれ（周防内侍）

注|| 春の夜の夢のような、はかない戯れの手枕をしていたがため、つまらない浮き名が立つのを口惜しく思います。

一、受験資格

漢字・かなとも二級以下のもの（漢字作品には支部名・級・氏名（号）を競書と同じく筆によって揮毫する。かなの場合は名（号）又は雅印を捺したうえに、左下隅に鉛筆で級と支部名、姓号を記入する。）

一、受験料 一点につき 千円。

一、成績により一級以下の相当級に編入する。

▼第四十二回詩文書部課題

○第一部 「半切」次の俳句（原文を尊重すること）半切35cm×135cmに揮毫したものの一点

※形式は半切の場合は縦作品に限る

○木曾路ゆく我も旅人散る木の葉（臼田亜浪）

註Ⅱ「木の葉散る」「廻国のあとを追ひつつ」の前書。木曾路を行く廻国の姿に、旅行く自分の姿を想い、旅人であることの感慨を深くしたのである。旅愁が表れた句

一、受験資格 二級以上のもの。

一、受験料 一点につき 三千円。

一、成績により六段以下の相当級に編入する。

詩文書受験者の事情により昇段試験の課題を半切12（35cm×68cm）に二点（書体〈書風〉を変えるか縦・横にする）揮毫しても受験することができる。ただし、現在二級・一級・初段・二段の人は一点でもよい。

○第二部 「半紙」次の俳句（原文を尊重すること）を半紙に揮毫したものの一点

※形式は縦作品に限る

○蟻の道雲の峰よりつゞぎけん（小林一茶）

註Ⅱ「蟻」えんえんと続く蟻の列。それははるか地平の果ての入道雲から続いているのであろう、の意。大胆・奇抜な表現である。

一、受験資格 二級以下のもの。

一、受験料 一点につき 千円。

一、成績により一級以下の相当級に編入する。

新 書例集刊行

日本書道院役員、審査会員の作品

日本書道院展公募一科、並びに同人。

毎日書道展公募サイズ、二尺×六尺、二・四尺×五尺のサイズ

漢字・かな・詩文書二〇八点掲載

一、A4判 上製本

一、会員配布 五〇〇〇円 送料込

▼第十六回硬筆部・昇段・級試験課題

○応用部 次の課題を「硬筆用紙」に書いたもの一点

・静かに優美に清浄に降る雪の美しさを表現するナンバーワンの言葉は細雪でしようか。

一、受験資格 一級以上のもの。

一、受験料 一点につき 二千円。

一、成績により六段以下の相当級に編入する。

○基礎部 次の課題を「硬筆用紙」に書いたもの一点。

・甲骨文字は人間の行為の可否について 天の意を問う神聖な文字であった

一、受験資格 二級以下のもの 作品には支部名・級・氏名（号）を競書と同じく硬筆用紙に書く。

一、受験料 一点につき 千円。

一、成績により一級以下の相当級に編入する。

― 出品についての注意 ―

一、〆切 十月二十日 発表十二月号

一、作品には十月号発表の競書成績の段級と支部名又は府県名、氏名又は号を書いた小票（たて11センチ×よこ4センチ・競書用出品券使用可）を作品の左下に貼付する。又作品左下隅にも同じく鉛筆で段級・支部名・氏名を記入する。硬筆部は『硬筆用紙』に記入する「級のなものは新とすること」。

一、漢字部・かな部・詩文書部の一級以上の者は第一部「半切」へ、『硬筆部は応用部・硬筆用紙で』出品のこと。

一、各部で昇級できなかった者は氏名を発表しない（規定違反も同じ）。

一、昇級試験の作品は競書作品と別にし、必ず封書に「昇試」と朱書のこと。

一、受験料は振替にて作品と同時に送付のこと。

一、提出した作品は一切返却しない。

○月刊「日本書道」十月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

○「半切・半紙」出品作品には雅印押印の習慣をつけること。